

15. 明治女学校のひでと画家倉田白羊

小谷清三郎・たよは男5人女3人の子どもがいたが、末っ子の三女ひでは1890（明治23）年の生まれで、源之助・仲治郎が渡米した年に根本尋常小学校に入学している。小学校時代に前述したキリスト教徒の代用教員今村狷介の教育を受け、宣教師の報告のような児童の一人であったとすると、それなりに影響を受けたであろう。そのような経緯が女学校の選択に関わっていたかもしれない。

1905（明治38）年に根本尋常高等小学校を卒業すると、どのような経緯があったかはわからないが、前述のらくの書簡【50】からみて、その年の4月明治女学校に入学したのではないかと考えられる。

ひでは、年月日未詳であるが仲治郎宛に書簡【370】を出し、明治女学校が経営不振なので他に転校するため試験を受けたいと述べている。長い書簡は明治女学校の置かれている現状や学校の沿革などが書かれ、当時在学していた人物が学校や教師に対して、どのようなことを考えていたかの証言資料として、極めて重要な書簡なので全文を紹介する。

「為替早速御送り被下ありがたく存じ候 私事帰国中に学校の事に付き、御話置き候が御承知の通り、當校は古くより成立致し居り候へば、名は今に至りても聞え居りて如何なる人も知り居り候へ共、そは岩本先生の校長たりしたために候へ共、もと番町に有之候節、校舎も充分にたてあり、其頃はあまり高等女学校などは多く無之く、加ふるに岩本先生の熱心なる女子教育をもってせしたためと申され候、然るに其頃大火有之候て校舎及寄宿舎共に焼失せしたため、當巢鴨なる庚申塚に一度健て尚續け居り候處、如何なる事情にか、岩本先生は突然、小此木先生と申只今学校の側に御出被下候方に学校の事一切を託しなされ、実業會に入らせられ候てより、以前の小此木先生引受けなされ其後續け遊ばされしが、都合上昨年四月丁度私が入学せし折に、福迫先生と申只今の校長、四国の中学校の校長に辭令下りしかど辭して、明治女学校の校長と成り小此木先生の後を引受け色々不充分の處など、先年四月に改正して續け居り候が、然程とは思はざりし学校の借財有之候て、とても此後如何なる福迫先生にても續けかぬるとか、校内には一般に噂御座候、

最も噂のみには御座なく候、現に福迫先生御自身にて校堂修身の時、財政上毎々奔走致し居りせはしくて教授もよく出来ないて、生徒に對して気の毒などと御話し遊ばされ候、先日教員會議御座候て其席上にて日頃、大変に悪口つきなされ候、他学校の事を大変ほめ■■て、明治女学校をひどくのゝしり候由、寄宿生活し居り候當校の学友は皆福迫先生の感化と云ふべきか、

生徒一同の間は父母も兄弟も及ばぬ様なる一趣他校と差異御座候て、校友の中には一切秘密などなく友どちらにて友の噂など仕かけ候ても云へかけられし者、かへってその人に忠告を加へるやうなし居り候、され■■此度などは種々寄宿舎の中にては一同相談の上四月には必ず續け、此学校立つ事能はざるべしとて最早出づるばかりの仕度なし居る由に候、

他の先生などにはかまはざれども、一同福迫先生の御恩には一方ならず■■居り候へば、義理として一同退学すればみすみすつぶれるを見るあたはずとて悲しみ居り候、一同退学する所以は色々當校に關係なき者には学校の不名譽故話すあたはず、先日も生徒一同（と申候ても一年生だけ）相談なし学校に火をつけ焼きはらい候はば、此儘つぶれ候ても学校の不名は出でざるべしと、かやうなあさはかな考へまで起すやう成り候とは私共始め一同悲しき次第に候、

然れどいたづらに学校のみ思ひたりとて、皆々国を出づる時の事を思ひば、必ず歸へる迄には望み通り勉強せねばならずとて、ここに一同四月すぎに学校立たざれば、他校に轉学する事に致し候てそれぞれ仕度致し居り候、

付いては私事も区内にては始めて女学校などに入学せしなれば、帰へる迄に此儘にては皆々様に合する顔もなく、種々考へ候て女子大学の附屬高等女学校の四学年に試験をうけ申べきやと思ひ申候、

付いては此際皆々に此手紙御讀み被下御相談なし被下度、兄上様事四月迄に御出京被下候ハズ私も色々都合宜しく候が、何卒御相談の程願上げ候、学校事は外の人に御話し被下まじく候、道徳上には少しもさしつかひなき事に候、先づは之にて、

英子 兄上様（欠損）上様 今迄程度ひくきたため他校に轉ずる事かこく候、入学するとせば、もはや手讀致さざれば試験後れ候間、早く御返事被下度まち居り候」との書簡である。

ひでは文言に「…昨年四月丁度私が入学…」としているので、書簡の差出しは1906（明治39）年であるが、仲治郎宛てであるので、米国から帰国した1906（明治39）年11月27日以降とすると、12月末頃の書簡ではないか。書簡には「…兄上様事四月迄に御出京被下候ハズ、私も色々都合宜しく候が何卒御相談の程願上げ候…」と1907（明治40）年の4月までには、女子大学の付屬高等女学校4学年に転入試験を受けて、転学する予定を伝えたかたかもしれない。書簡には「…皆々国を出づる時の事を思ひば、必ず帰へる迄には望み通り勉学せねばならずとて、ここに一同四月すぎに学校立たざれば、他校に轉学する事に致し候てそれぞれ仕度致し居り候…」と、明治女学校の学びがさらに続いていく決意を生徒たちは表明している。

ひでが入学した明治女学校は、日本に外国人経営の学校はあるが、小学以上の女子教育機関がまったくない状態にあつて日本の女子教育に外国の教育法をまかせておくべきでないとの創立主意書をもって開校した女学校である。牧師木村熊二が呼びかけて島田三郎や田口卯吉、植村正久、巖本善治が発起人となり、田口の姉であった木村の妻・鏡子が取締役になり1885（明治18）年に開校した。ただ翌年に木村鏡子が亡くなり1887（明治20）年からは巖本善治が教頭となって実務を執った。巖本は女学雑誌の主宰をしていた関係で寄稿者であった星野天知や北村透谷、馬場孤蝶、戸川秋骨、島崎藤村、青柳有美らを教壇に迎えたという。教師は大西祝（哲学）や元良勇次郎（心理学）、大和田建樹（国文学）、幸田延子（音楽）、津田梅子（英語）、若松賤子（英語）、荻野吟子（医学）などが務め、富井於菟・新井奥濠・島田三郎・植村正久・内村鑑三（生物学）らが講師になったこともあった。

1892（明治25）年に巖本が2代目校長となった。巖本もプロテスタントだったが、校内での宗教的儀式はなく、布教的なことを学校教育に入れなかった。生徒には神の下で平等な男女が健全な家庭を営むための心構えを教えた。校舎や寄宿舎はボロ屋であり、生徒の服装も質素だったが、生徒たちは全国から集まったという。学校運営を話し合う評議会は生徒たちが参加する民主的なもので、寄宿舎も生徒の自治を尊重した。

1892（明治25）年に東京・麹町区下六番町に移転し、最盛期には生徒が300名在籍したが、教会や宣教師の経済的援助を受けなかったので学校経営は厳しかった。そんな時期、1895（明治28）年2月に深夜の失火があり、校舎・寄宿舎・教員住宅の大半を失い、焼け残った教室で授業を続けた。翌年東京府北豊島郡巢鴨に移転して校舎を新築することができた。当時、社会一般の女子教育に対する理解が十分でなかったなかで、広く支援者を募って資金を得る私学経営を進めることは理想で、結局、犠牲的な献身でしかなく、財政もその状況から抜け出すことはできなかった。

結局、1904（明治37）年に巖本は校主に退き、教師で寄宿舎の舎監だった呉久美（呉文聰の姉）が校長になって支えた。しかし、ひでの書簡にあるように「…福迫先生御自身にて校堂修身の時、財政上毎々奔走致し居りせはしくて教授もよく出来ないて、生徒に對して気の毒などと御話し遊ば

され候…」と、教師たちは生徒たちに学校運営にある財政的な問題を伝え、緊急事態を理解させていった。結局、財政問題の破綻が原因となって、1908（明治42）年に閉校したのであった。

その後、ひでが明治女学校からどのような経緯を辿っていったかは、書簡類がないので不明のままであるが、他の書簡を分析するまでに至っていない。戸籍によると、ひで（22歳）は倉田重吉（雅号「白羊」・30歳）と1911（明治44）年7月31日に婚姻届を出し、東京市牛込区弁天町134番地を住居とした。倉田は佐倉藩士の漢学者倉田幽谷を父にもち画家浅井忠の親戚にもあたる。1901（明治34）年に東京美術学校西洋画科選科を卒業すると、牛込区弁天町の中村忠誠の養子になり、その後群馬県で県立中学の美術教員や太平洋画会会員になっている。1903（明治36）年、22歳の時に群馬県沼田町の高橋てふと結婚するが、翌年には教員を辞めて上京。中村家とは離縁し倉田に入籍し、画業をしながら時事新報社の記者になる。てふと離婚したものの、長女羊子が誕生した。26、7歳の時に第1回と第2回文展に連続して入選。1907（明治40）年5月に石井柏亭や山本鼎、森田恒友の三人の画家により創作版画や美術評論を発表する月刊同人誌『方寸』が創刊されると、翌年に白羊は、小杉放庵、織田一磨、坂本繁二郎らと加わり、活躍している青年画家や版画家、そして美術評論家が参加するグループになった。ドイツで刊行された雑誌『ユーゲント』をモデルにしていたという。菊倍判8ページ（のち16ページ）の雑誌だが、近代版画史にとって重要な木版・石版・銅版画をはじめ、漫画などの作品や評論、紀行などが掲載された。この年には「パンの会」も結成され、参加することになる。

美術文芸雑誌である『方寸』は、ひでと白羊の出会いや結婚に至るまでの様子などを知るうえで重要である。『方寸』第四巻第一號（明治43年1月10日発行）には、「信濃の旅」という一文が掲載され、11月13日から1週間、倉田白羊や山本鼎、石井柏亭、小杉未醒、北原白秋らが懇親会を兼ねて信濃のスケッチ旅行に出かけているとわかる。この旅では汽車などで短歌を詠んでいるが、『方寸』に掲載されたもののなかに、「なみなみの戀にはあらず旅路より夜毎文書く安房の少女に」と、柏亭が白羊の旅での姿を詠っているところをみると、明治42年11月頃に白羊とひでは手紙のやり取りをする間柄であったようだ。この年に白羊は時事新報社を退社し画業に専念するようになる。

明治40年4月以降、ひでの転学は明治女学校から女子大学付属女学校4年生に転学したかどうかは不明であるが、もし転学していれば翌42年3月に転学先の女学校を卒業する予定になる。いずれにしろ、今のところ不明のままである。

『方寸』第四巻第四號（明治43年5月10日発行）に「小日向台」という石井柏亭や倉田白羊、山本鼎らの交換書簡という形の文があり、柏亭が白羊に送った文面に「…布良、白濱、千倉那古、と廻り根本にては倉田君の御舅の家の前をも過ぎりたる筈なり、しかし其名を忘れたるは遺憾也…」とあり、明治43年5月10日発行のなかで、すでに柏亭は「倉田君の御舅の家」といつている。続いて「根本より」というタイトルでは、石井柏亭や倉田白羊、森田恒友、小杉未醒らが書いて、そのなかで白羊が未醒に宛てた書簡文では、「今日の僕を君に見せたい、見て貰い度い、今日は僕は立派な婿である、午後五時から僕を主賓としての宴席が開かれるのだ、…僕は今總ての人達の標的となつて居るらしい、僕が奥座敷の宴席に出る可く着物を被換えて居ると諸所で私語の聲くすくす笑ふ聲などが盛んに聞えて来る…六日午後二時根本にて」とあり、金澤屋で白羊を主賓とする宴席があったようで、それは結婚したことでの宴会であったのだろうか。

そして、白羊から恒友に宛てた書簡文に「今日妻と妻の姉等と官幣大社安房神社に詣でた、妻の正装はいたく土地のものゝ注目を惹いて居た、妻の歩調の甚しく遅緩なのに閉口しつゝ自分も牛の

歩む如く…四月九日根本にて」と、ひでを妻といい、次の書簡文も根本から「…今日午後晴れたから久々で醫者どん岩に行つて見たそして小作を得た、若い妻はホワイトを出して呉れた、油の着いた指を氣にして岩になすりつけた、顔なじみの海女達は僕等を見て唯ニヤリとした丈である…四月十一日」に、妻と書いてあるので、婚姻届は後にして、明治43年3月頃結婚したのであろうか。清三郎は明治43年の7月27日に亡くなっているのに、翌年7月31日に婚姻届を出している。3月頃は清三郎が脳症のため寝込んでいても、白羊とひでの結婚のことは仲治郎がいたので対応できたと思われる。

青木繁を追悼する『方寸』第五巻第参號（明治44年7月10日発行）は、同人誌の最終号になった。柏亭や恒友のいないなかで白羊とひで夫妻は、牛込区弁天町124番地の自宅を方寸社の事務所として最終号を編集したのである。青木繁は根本の隣村の布良を訪れ、同姓の小谷喜録宅に滞在して『海の幸』を描いた。そのことはひでにとっても親近感があったのではないか。明治女学校では文学や美術などの分野に影響を与えた教師たちによって、英語や漢文なども原文でおこなう授業がおこなわれ、個性的な女学教育を受けたひでは、白羊が要求することに対応できる知力を身に付け、一緒に編集作業ができたのだらうと思われる。

なお、白羊は大正デモクラシーのなかで安房の地から児童自由画教育を推進し、自由教育のあり方にも一石を投じてきた。1922（大正11）年には農民美術研究所の副所長として、友人の版画家山本鼎に招聘され、信州上田に移り住んでいる。